

---

# 機動戦士ガンダム～R.C.

中谷正樹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダム R・C

### 【Nコード】

N9237J

### 【作者名】

中谷正樹

### 【あらすじ】

宇宙世紀が忘れられて幾世紀。  
人々は銀河に居場所を求めている。

## プロローグ

これは、いつか果てしないどこかの世界であった物語。

人は、地球を離れ、銀河の果てで生活し、滅び、栄え、生まれ変わりを。

幾つもの歴史を越えて、人は存続し続けた。

そして、人は幾つもの歴史を忘れ、地球すらも伝説となった頃。

この物語は幕を開ける。

宇宙世紀が忘れられて幾千年。

この頃、暦は運河暦リバーセンスチュリーと呼ばれるものに移り変わっていた。

だが、人はこんな時代でも戦いを止めようとはしなかった。

「いいか！敵は所詮海賊だ、訓練どつりに仕留めろよ！！」

「第1、第2砲塔照準良し！」

「各艦…一斉射、秒読み5…4…3…2…1撃ち方始め！！」

数隻の宇宙戦闘艦から行われるメガ粒子砲の一斉射は、漆黒の宇宙に吸い込まれる。

その軌跡は、砲撃と呼ぶには、あまりに美しい光景だった。

「着弾まで、3…2…1、今！」

爆発の閃光が、多数。

そしてその数秒後

「ミサイルと砲撃多数、海賊船が撃ち返して来ました！」

「全艦、散会！回避運動、対空防御急げよ！」

ここは惑星「アレラ」上空衛星軌道宙域。

この時代特に変わったことでもなく、日常的に起こる小さな戦闘人という種は飽きることなく戦争を続けていた。

3

リバースセンチュリー（R's.C）2988

地球を捨てた人々は広大な銀河に文明の息吹を咲かせた。

最初に、「宇宙世紀」の血脈のものたちが、次に「アフターコロニー」の血脈

三つ目の血脈は「アフターウォー」そして、新たに現れた「コスミック・イラ」。

四つの文明はそれぞれ、「運河」と呼ばれる人類の生存可能宙域に国を立ち上げる。

「野郎ども！！サードリバーのボンクラどもに目にも見せる！！  
MS隊突撃！！！」

この4つの文明の共通点。  
モビルスーツ  
MSの存在。

「海賊がMSを展開！！ザクウオーリア3、ジン4！！」  
「ひるむな！たかだかバツテリー駆動のMSだ！！こちらもMS発進！！ドートレスとファーストリバーの連中から借りたジエガンがあつただろ、そいつも出撃させる！全機ビーム兵装！MS隊出撃！！」

戦艦のカタパルトから発進するMS。

綺麗な編隊を組むと、迫りくる海賊のMS隊と交戦を開始する。

この時代、どこにでもある光景。

いつの時代も…活躍してきた兵器モビルスーツ。

幾世紀経とうとも、人の持つ剣であり続ける機械人形。

この物語は、MSという力を駆り、戦い続く時代を生きる人々達の物語である。

## 世界観の設定

「あらすじ」

宇宙世紀ではない、いつか存在した世界。

人類は、母なる星を巣立ち、様々な銀河へと旅立ってすでに数世紀が過ぎ去っていた。

舞台

：地球環境の悪化や、人口の増大を抑えることのできなかった人類は宇宙でスペースコロニーを建設。

その住処を宇宙へと移す。

その間も、多くの戦争を経験した人類の内、戦争を嫌い外宇宙へと逃げ出していく。

そうして人類は、外宇宙へと進出を果たし、さまざまな星へ植民を開始する。

しかし、それは一度だけではなかった。

暦を変え、世代を変え……人は外宇宙へと逃れてくる。

そうして、逃れた人々は外宇宙に4つの勢力として存在する。

MS

：大昔の戦争で使われていた人型兵器、通称「モビルスーツ」。

様々な種類が存在し、大別すると「UCMS」「ACMS」「AWMS」「CEMS」の4種類となる。

この世界のMSは、この4種類のMSの技術に基づいて作られており、2種類のMSの技術を混ぜて建造されることも珍しくは無い。

#### 四つの国家

：それぞれの国家は、「運河」<sup>リバー</sup>と呼ばれる人類生存可能宙域を生活圏としており、現在確認されている運河は推定4。その四つの運河にはすでに4つの文明が栄えている。

・「ファーストリバー」《第一運河》<sup>リバー</sup>

：「宇宙世紀」と呼ばれる時代の末裔たちが生み出した国家。

四つ存在する運河の国家の中で、一番歴史が古い。

MSの特徴としては、高レベルでバランスが取られたMSで、安定性などに定評がある。

また、ファーストリバーはニュータイプと呼ばれる先読みの能力や精神感応能力に長けた人々の出生地としても有名である。

・「セカンドリバー」《第二運河》<sup>リバー</sup>

：「アフターコロニー」と呼ばれた時代の末裔たちが営む国家。

基本的には中立であり、平和主義国家として通ってはいる。軍備と呼ばれるものは存在していないが、諜報治安維持のための軍事的警察組織「プリベント」が、少数の超高性能MSを数機保有している。

だが、そのMSですら全容は明らかにされておらず、プリベントの活動も通常の治安維持や内偵任務などMSがおおよそ必要とはされない。

しかし、大規模テロなどが起きた際にMSが投入された事例がい

くつつか存在する。

・「サードリバー《第三運河》」  
：「アフターウォー」と呼ばれた時代を持つ文明の国家。  
かつて、ニュータイプが多く存在していたが、現在においてニュータイプがほとんど確認されていない。

この国家のMSの特徴は、高い汎用性と整備性、またニュータイプ専用兵器の性能の高さである。

また、兵器の性能効率化が図られており、「サテライトシステム」などが代表例である。

「ビットシステム」の進化系である「フラッシュシステム」は現時点でも他文明が再現不可能の技術である。

・「フォースリバー《第四運河》」  
：「コズミック・イラ」と呼ばれた時代の末裔たちの国家。

他の三国とは違い、唯一帝国主義で運営される国家である。

代表者は「クイーン・ラクス」現在は34代目のラクスであり、初代ラクスとスーパーコーディネーターのキラ・ヤマトの子孫である。

カリスマ溢れるその手腕は初代ラクスに匹敵するものだといわれる。

また、初代ラクスが戦争終結のために指揮した「歌姫の騎士団」を起源とする精鋭集団「ラクスオブナイツ」なる親衛隊が存在し、彼らが駆るMSは所謂ガンダムタイプのMSであり、親衛隊隊長は「フリーダム」副隊長には「ジャスティス」と呼ばれる超高性能MSが与えられる。

そしてこの国家のMSの特徴としては、超伝導体の素材が導入されていることにより、バッテリー駆動のMS出力が他の国家の核融合系列の量産MSに匹敵する。だが、その他の装甲材やビーム技術などは他の国家より劣っている。

## 世界観の設定（後書き）

こんにちは、それとも、こんばんわでしょうか？  
とにかくはじめまして、中谷正樹です。

前回から書き始めました、この「機動戦士ガンダムR・C」  
このネタ自体は昔から温めていたもので、当初はユニバーサルセン  
チュリーの世界観で話を造ろうと思っていました。年表や設定資  
料に目を通すとすでに入り込む余地が無いことや、ガンダムシリ  
ーズのクロスオーバーなどを書きたいと思うようになり、新たに世界  
観構築という結論で、この話を作っています。

時代設定としては「ガンダム」の時代と大体同じ位の時代で、4  
つの文明はガンダムの歴史埋葬から逃れ外宇宙で栄えているとい  
った設定です。

そのうち、ターンタイプのみMSや、ガンダムシリーズ以外の作品と  
もクロスするかも……。

まあ、初心者でつたない文章ではございますが、長い目でお付き合  
いいただければ幸いです。

それではまたお会いしましょう。

## 第1話

- 運河暦2988年 4月7日 PM 2:50 -

：サードリバー 工業惑星「アレラ」：アレラ駐屯軍地上基地 司令室

司令室内部は、比較的穏やかな雰囲気といって差し支えなかった。警備艦隊指揮官ナオヤ「セト少佐の報告書を読んだ司令は、ご苦労であった。と労いの言葉をかけた。

「さしあたって、海賊どもの撃退には成功しましたが、連中がそのまま諦めるとも思えません」

「うむ、君の指摘はもっともだな。さすが、あの傲慢なフォースリバーの出身者どもといったところか」

司令官アポック少将は、先ほど従兵に入れさせたコーヒーを飲みながら、セト少佐の報告を聞く。

「いえ、この際傲慢かどうかはあまり関係ないかと思われます。この所の連続した海賊の襲撃はどうにも妙です。もしかしたら、新型機の情報が漏れているのでは……」

「馬鹿な、機体は未だにフレーム状態。艦装が済むのにはあと数ヶ月かかる、そんな状態のMSを盗み出す意味が無いぞ」

セト少佐のこの言葉に、アポックは呆れを含んだ返答をする。

「ならば、破壊が目的であるというのはどうでしょう」

セト少佐の言葉には、半ば確信じみた自信が含まれていた。

「まさか、なぜ海賊がそんなことを……、?!まさかセト少佐、君はあの海賊が実はフォースリバーの正規軍だとも言つのかね?」

「このアレラは工業が中心の惑星です。駐留軍の規模も大きく新技術の強奪はあまりにリスキー、海賊達がここに殴りこみをかけるメリットがあまりに少ないと思われます。やはり、正規軍の扮装か、または海賊たちをそそのかしてここを襲撃させているか、どちらにしてもあの「帝国」がバックに居るのは間違いないと思います」

「……、卑劣な」

忌々しい

表情だけで、アポックはそう語ってみせたようだった。

「司令、事はまだ水面下での動きですが、奴らは何らかの既成事実を作り、このサードリバーに介入するはずですよ」

「……連中のお家芸か」

「まあ、「正義」というもののために戦っているんでしょう。俺には理解できませんが」

「私もだよ。予定自体は滞りないが現状は時間がないということか、今でさえ、ベスト以上の結果だというのに」

「そこでなのですが、今回私の部隊の再編のためにある男を軍に呼び戻したいと思うのです」

ここからが本題だと言わんばかりに、ナオヤ「セトは強調する。

「ほう？君の部隊のヒメサキ少尉だけでは不満かね？」

対するアポックのほうは、またかと言わんばかりの顔だった。

現在彼が受け持っている部隊の隊員は、実力者ぞろい。その大半はセト少佐自身がスカウトした人材だったりするのだが、彼にとつてはまだまだ不満だった。

アポックの言ったヒメサキ少尉フルネーム「レイナ」ヒメサキ「は士官候補生時代に実戦も経験し、士官学校を上位の成績で卒業した才女である。

引く手あまただった彼女を少々強引に引っ張ってきたのがセト少佐だった。

ゆえに、彼の上司であるアポック少将の風当たりも強くなっている。

しかし、ここへ来てさらに人材が欲しいというのは中々欲深く感じられた。

「司令、あいつらはまだ実戦経験が浅いです。3回目の出撃においても、どうにも柔軟性にかけるきらいがあります。引っ張っていくような奴が必要です」

本来、セト少佐にしても現在の第1小隊長であるヒメサキ少尉を育てて今後の戦局に備えるつもりだったが、新型MS開発計画「ZLD計画」の露呈は、事態を加速させるものだと感じていた。

故にセトは、ここでリーダー格となりえる人材が必要であると考えていた。

「ふむ……、で君の呼び戻したいという男の名は？」

と、セト少佐に聞いてみるものの、アポック少将は予想は付いていた。

この惑星「アレラ」にセト「ナオヤ」の率いる部隊が来る前の頃、彼には優秀な部下が居ると聞いていた。

戦術眼に優れ、MSの操縦技術も高く予備役行きに際しては、セト少佐はかなり惜しんでいたと聞いていた。

アポックは何処かで聞いたその予備役入りした中尉の名を思い出そうとしたが、セト少佐が、その名を思い出す前に告げる。

「私の元片腕 コウメイ「カヤマ」予備役中尉です」

その名を聞いた時、アポック少将は「ああそうだった」と思い出した。

・サードリバー 工業惑星「アレラ」 工業地帯

「コウメイ見てみるよ、また軍の連中と海賊の小競り合いだぜ」

「ああ？いいよ、見なくても運転の邪魔だ」

空が明るみ、夜が明ける時間帯。

1台の車が、朝の車が動き出す前の車道を走っていた。

「お前：もう少し世間に眼を向ける」

「だからって、運転中に差し出すなよ。読めるわけないだろ」

助手席に座っている男が、運転席に座っている男に新聞の見出しを向ける。

そこには、「海賊8度目の襲撃」という見出しだった。

「それに第一海賊の襲撃なんて、珍しいものじゃないだろ」

「まったく、面白みが無いなお前は」

フンと鼻を鳴らす助手席に座る短髪の青年ガル「アーバスは運転席に座る自分の同僚意であり友人の青年コウメイ」カヤマの素っ気無さに、すっかり興を殺がれてしまった。

「運転中に新聞なんて勧めてくるやつに、言われたくネエよ」

「馬鹿やるう、人と変わったことをやることによって個性を出すんだろうが」

「てめえのは、唯の非常識だ。つーかもうそろそろ着くぞ」

町外れにある小さな工場。

トラックを倉庫の入り口付近に止め、コウメイとガルは工場の中へと入る。

「親方、今戻りました」

1階の事務所スペースに入り、コウメイは自分の雇い主でありこの工場……いや、この工場のオーナーであるカイン＝リープサイドに報告する。

「ご苦労だったな、コウメイ。どうだ、パーツの方は？」

「報告書にもしましたけど、精度自体は問題はなさそうです。数は揃えましたから、あとはフレームに組み付けて微調整ですね」

かけつけ一杯というように、コウメイは事務所の据付の自動販売機でコーヒーを買う。

「ようやく、一段落だな。スケジュールは誤差の範囲内だから、何とかトライアルの期限には間に合いそうだ」

「来月ですよ？また徹夜か……」

ウンザリしながらコウメイはコーヒーをぐびぐびと飲み干す。

「ぼやくな、経営厳しいんだからこれからもっと忙しくなるぞ」

「うへえ……」

気が遠くなりそうだ……

コウメイは、自分のデスクに座ると天を仰ぐ。

今でさえ、かなりの詰め込んだスケジュールをこなしてきたのだ。どんなにタフな奴でも音を上げかねない状況をよくもまあ耐えたもんだと思えるほど。

さらにこれが続くとなると、正直泣きたくなりそうだった。

「親方、荷物運び込みましたよ。あと、オカミさんが飯だって」

「もうそんな時間か。コウメイ、ぐーたれてないで行くぞ」

だが、それでも

「ウィーっス」

「コウメイ」は「カヤマ」としてこの日常は、宝物のようなものだった。

## 第1話（後書き）

もう少し、練ればよかったかとも思いましたが、すじ道が出来ていて放置していると何か書きそうにないので、思い切って投稿しました。

ちよくちよく描写の足りない箇所を修正するかもしれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9237j/>

---

機動戦士ガンダム～R.C.

2010年10月9日02時54分発行